

8 月 15 日 の 靖 國 神 社



正午を期し1分間の黙禱を捧げる参拝者

例年のことながらこの炎天下心ある人9万4千人が参拝したが、日本のマスコミはそのことを少しも報道しない。僅か7人ばかりの閣僚が参拝したのを公的か私的かと愚かな記事を掲げるだけである。政府は武道館で戦没者追悼式を例年通り行い、7,500人が参列したと報じている。これは戦災犠牲者も含むので、それなりの意義はあらう。しかし、戦死者に対しては霊の宿る靖國神社で行はなければ申訳ない。靖國神社で会おうと言った戦死者の気持に報いずして何の追悼式ぞや。

このように政府もマスコミもこの日の靖國神社を無視しているが、民間団体の「英霊にこたえる会」では例年通り全国戦没者慰霊大祭を行った。この催し今回で十九回を数え、参列者は七三二人で拝殿は一杯になった。「英霊にこたえる会」は元来靖國神社公式参拝実現を目的に結成された団体であるが、現首相は閣僚の靖國神社参拝は自粛せよと血迷ったことをいう。そればかりではない、来年は国会で戦争謝罪決議を行おうとしている。英霊を冒瀆することこれより甚しいものはない。

“なんにも言えず 靖國の
宮のきざしはしひれ伏せば
あつい涙が こみ上げる
そうだ感謝の その気持
そろそろそろう気持が国護る”
「そうだその意気」
西條八十 作詩
古賀政男 作曲
昭和十六年
“暑さきびしい 終戦忌
こゝにぬかづく人々の
誠の気持ちは変らねど
驕る心の 権門が
のばす手足に 国亡ぶ”

会 報
特 攻
平成6年11月

第21号
〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
編集人 田 中 賢 一
発行人 木 村 元 正

昭和天皇御製
(昭和六十一年八月十五日)
この年のこの日にもまた靖國の
みやしろのことにうれひはふかし

目 次

8月15日の靖國神社	1
①の油絵奉納	3
政府主催の戦没者追悼式に 物申す	3
世田谷特攻観音年次法要	4
学徒出陣回想	6
不運つづきの出撃に号泣す	8
人間魚雷「回天」	12
特攻基地第二国分の記より	17
慰霊行事は戦後生まれの手で	22
高野山空挺の墓前祭	24

八月十五日10時30分より靖國神社境内に張られた大天幕の中で、英霊にこたえる会と日本を守る国民会議（代表 黛敏郎）共催の第八回戦没者追悼中央国民集會が開催された。その際に主催者の一人である英霊にこたえる会の井本台吉会長の挨拶は、憂國の至情迸るものがあるので、その要点を紹介する。なおこの集會の参加者は千名を越した。

「……本年のこの集會はこれまでの追悼集會とは異って、政局が極めて異常な動きを見せている中であつての催であり、皆様方におかれても同じ思いでお越しいただいたのではないかと推察いたします。それは単に村山総理が公式参拝しないといった事柄ばかりでなく、來年のこの日を目途に大東亞戦争を侵略戦争と決めつけ、世界に向つて謝罪の国会決議をしようとする動きが与野党の心ない国会議員によつて進められていることでもあります。この國辱的売國的暴挙は絶対に阻止しなければなりません……」

さきの細川侵略発言といい、羽田前総理の戦争史観といい、その無知、無能に加えて、今日村山政権下での自民党の首脳がただ党利党略に走り、その立党の精神を忘却したこの輕率妄動は断乎糾弾しなければなりません。そも

そも政治家には歴史を裁断することはできません。にも拘らず祖國の歩みに水を差し、民族の誇りを傷つけることが、將來何をもたらすかの思慮淺薄さに、身の毛もよだつような戦慄を覚えるのは私だけではありますまい。それは何といつても英霊を冒瀆し、先人が血と汗で築き上げた我が國の歴史を反古にするばかりか、犯罪國家の烙印を自らが押すという前代未聞の売國行為を演ずることを篤と自省すべきであります……」



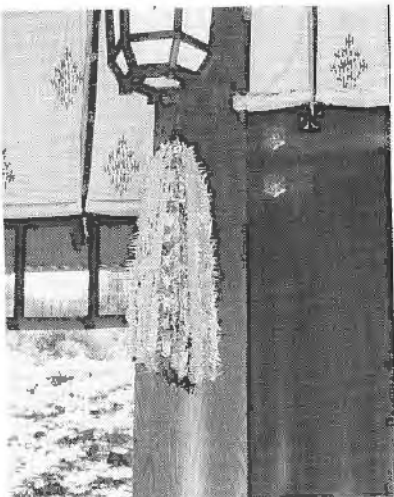
我が會の画伯達は本年も8月14、15の両日御祭神に因む油絵五三点を境内に展示した。15日は多くの参拝者がその絵に見入り、多大の感銘を与えた。出品者は伊藤直之、市川國雄、生田惇、中野友二郎、松本武仁の諸氏で、八月十五日に展示するのはこれで三回目となり、当日の恒例行事となつた。



松本 武仁

キリスト教徒やその団体には、靖國神社、護國神社等の祭典に公務員が参加したり、僅かな玉串料を公費で支弁したとて反対する者が多い。ところが千葉県茂原市にあるマリアの里日曜学校では、毎年「英霊にこたえる会」の行う戦没者慰靈大祭に千羽鶴を奉納している。本年も千羽鶴は拝殿の柱に飾られ、代表者から寄せられた手紙には、次のような一文があつた。

時の為政者や宗教団体の思惑とは関係なく、この田舎町で一羽また一羽と心一つにして折られてゆく「靖國の折鶴」を見る時、深い感動を覚えます……若い世代に生命を捧げた英霊の意味を、誰はばかることなく伝えていきたいものです。そして、すべてをこえたその愛の偉大さを……八月十五日皆様と心一つにして、英霊に感謝の祈りを捧げます。」



海上挺進戦隊の奮戦の油絵奉納

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

理事長 最上 貞雄

一艇もって一艦を屠
らんとしたもので、
戦隊は戦隊長以下一
〇四名、ベニヤ艇一
〇〇隻をもって編成
された。隊長には陸
士51期52期53期54期

去る7月29日「海上挺進戦隊の活躍」と題する百号の油絵を靖國神社に奉納した。制作は陸士54期の原田重穂君で、彼の小学校時代の同級生で船舶幹部候補生となった葛和幸作氏の熱誠溢れる要望により実現した。

当日は陸士57期皆本義博氏、幹候11期の橋爪藤雄氏、同小川明夫氏それに陸士54期の原田、最上が参列した。

原田君より先ず大野宮司に目録が奉呈され其の後昇殿参拝、終つて遊就館に移動、特攻関係が展示されている9号室の水上特攻のレリーフの上に掲額された「海上挺進戦隊活躍」の100号の油絵の除幕式が行われ無事奉納の儀式を終了した。

海上挺進戦隊は昭和19年7月より訓練が開始され10月には30ヶ戦隊が編成され、最後の決戦の地、フィリピン、沖繩、台湾に展開された。この部隊は泊地にある敵船舶に砲撃の爆雷を装着したベニア製のモーターボートによって夜間奇襲による肉迫攻撃を加え

の若い少佐大尉があたり、中隊長には57期を主体とした中尉少尉がその任に就いた。また小隊長には18年12月学徒出陣した船舶幹部候補生第10期11期を主体として見習士官があたり、一般隊員として船舶特別幹部候補生の当時16才の少年兵が主として充当された。戦斗の主力をなしたのは、この年若い少年兵たちであった。

昼夜を分かたぬ猛訓練の後、19年10月30戦隊が編成されたのであった。

これら海上挺進戦隊は国軍の大きな期待を担って、短期間に部隊を編成、不慣れな海上において無防備の特攻艇を操り、生還を期すことは出来ない不利な条件下で、敵艦艇を撃沈すること数十隻という嚇々たる戦果を挙げたのだ。しかし、当時は隠密部隊として、全く世に発表されないままに終わった。青春のすべてを抛つて鬼神の如き攻撃を敢行し、再び帰らざるもの一、六三名の多きに及んだ。海上挺進戦隊の業績は、その家族と国を憂う純粋な心

とともに、永く歴史にとどめなければならぬ。
是非靖國神社参拝の折には、遊就館の特攻の部屋で拜観をしていただきたい。色刷の立派なパンフレットも備えてあるので、自由にお持ち帰り願いたい。

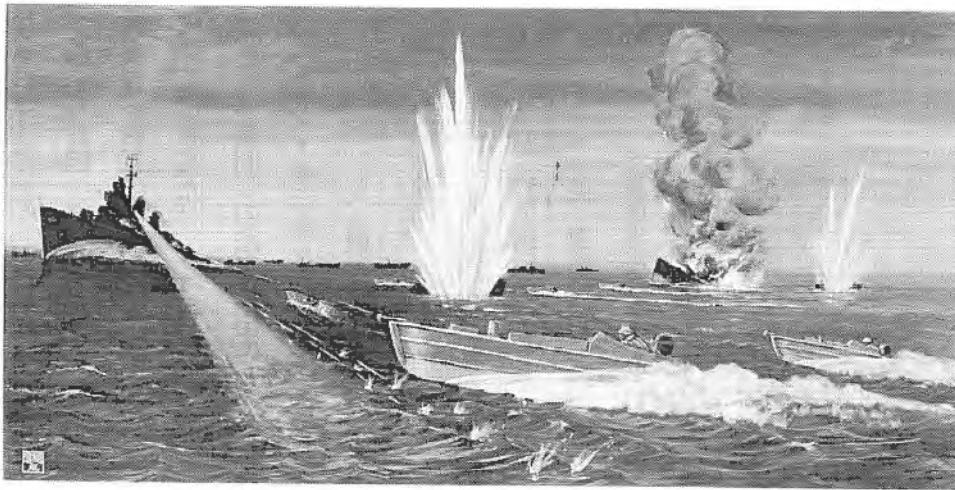
政府主催の全国戦没者追悼式

に物申す 田中 賢一

この儀式は全国とあるから戦死者だけではない、戦災で亡くなった人も含んでいるのであろう。それを追悼しようというのだが、追悼とは死後その人を悲しみいたむことであり、戦災でなくなった人に対しては、それはよからう。しかし、戦死者に対しては唯悲しんでいるだけでよいのだろうか、国を守る為に一命を棄てた人に、いくら感謝しても感謝しきれない筈だから、そのような行事にしなければならぬ。

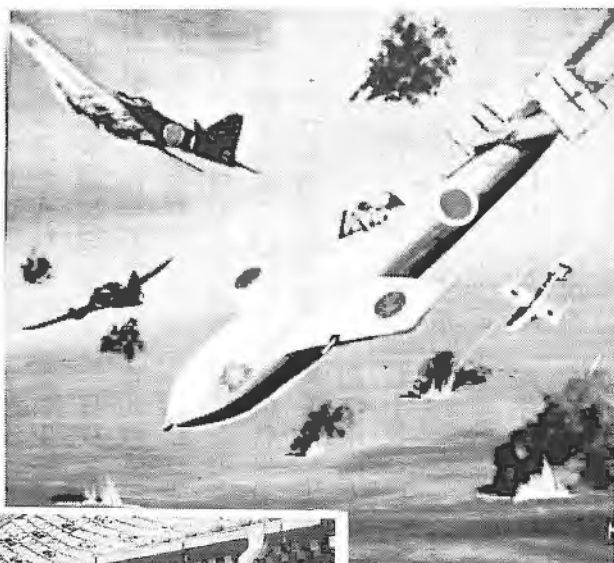
こんな世の中になつてしまつて、感謝することの最大の途は、戦死者の抱いていた精神とその行動を正しく後世に伝えることである。慰霊顕彰というが、顕彰が大事であつて、これこそが感謝にはかならない。

ところが何だ、村山首相の云い分は。新聞に出ているところを見ると、初めの四行ばかりで、戦没者に対し悲痛の思いが胸に迫るのを禁じ得ないと言ひ、そのすぐ後からアジアをはじめとする世界の多くの方々に筆舌に尽くしがたい悲惨な犠牲をもたらしたと言つている。英霊が悪事を働いたと声高々に叫ぶような男に、限らない憤を覚えるのは私だけではないだろう。



第43回特攻観音年次法要

平成6年9月23日 世田谷山観音寺 特攻観音奉賛会

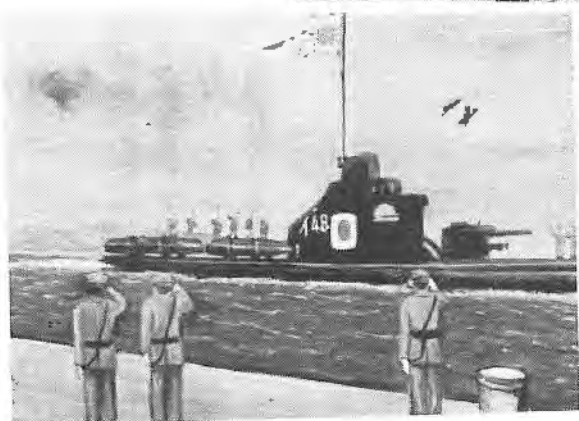


瀬島奉賛会長
祭文奏上

秋晴れのよき日、恒例の年次法要が行われた。今回は高松の宮家より献花を賜った(写真向って右最上段)
参加者は遺族七〇名を含み約五〇〇人、特操四期の竹下元首相も春の慰霊祭に続いて出席した。
駐日トルコ大使館付武官は毎回この法要に出席しており、今回は新に着任したハッサン・ギュルゲン陸軍中佐が出席

し、最後に追悼の辞を奏上した。

なお瀬島会長の祭文に続いて追悼の辞を奏上したのは、遺族代表第四御盾隊広島忠夫(海軍少尉)弟広島島文武、戦友代表藤本晴久



魂の声

一、ああはらからと故郷に替えるはこの身この命我らを措きて誰あらむ狂瀾既倒にめぐらさん

二、ああ人生のたのしみは長しといえど尽るあり意気こそとうと桜ばな今散るときぞ美しく

三、ああたらしちねの御心に報ゆることの薄くして書き残す この一封は健かにあわせと唯祈る

四、ああいとほしき 妹よやまと心のおみなえし幸あれさらば来る春に九段の桜にまみゆべし

五、ああ流れゆくあの雲に乗りて眺むる 大八州おおやしま後継ぐ人に 言伝てんままれ我らが祖霊の地



献歌 (石橋一歌)

篠原 久夫

言葉なし吾を育ててすこやかに
母上様の苦勞思えば

義烈空挺隊 松実留四郎

しきしまの大和男子ぞわれもまた

大君のため散るぞうれしき

例年通り会員の画いた油絵を展示したが、今回は肖像画を主とした。



(駐日トルコ武官追悼の辞の一節)

先の大戦において特筆大書さるべき
史実は、日本の特攻作戦であります。
私共は今でも、あなた方の永く後世に
残る崇高にして偉大な功績を思い起す
とともに、祖国を救う為勇戦敢闘され
た至誠と、犠牲的精神を永久に忘れる
ことはありません。……

本年も会員による油絵の展示を行っ
た。出品者は生田惇、伊藤直之、中野
友治郎、市川国雄、松本武仁、海法秀
一の諸氏である。今回は特攻烈士の肖

第一次世界大戦中わがトルコ軍は、
アタチュルク司令官の卓越した統率の
もとに、侵入した連合国軍を国外に撃
退することに成功しました。その際武
器弾薬が欠乏していたトルコ軍は「旅
順の日本決死隊に続け」を合言葉に、
肉弾戦法、即ち白兵戦によって敵を撃
退したのであります。……

像画一八点を主体としたが、海法画伯
の往時の名機を画いたもの八点も加
わった。

右上 富嶽隊 西尾常三郎

松本武仁画

左上 誠17 伊舎堂用久

生田惇画

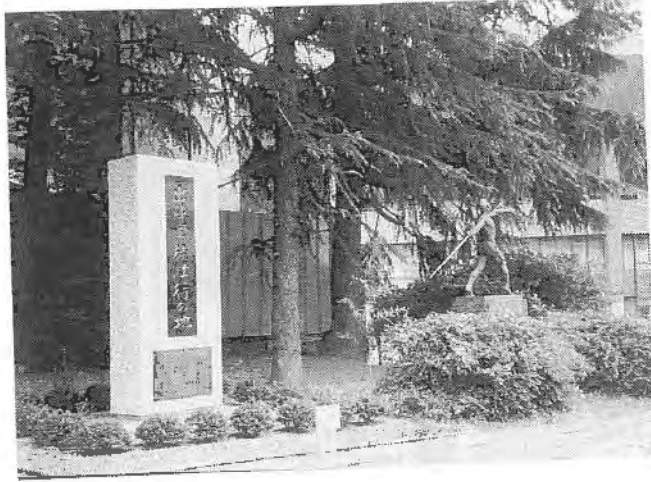
右下 薫空挺 桐村浩三

伊藤直之画

三人の会員で18点が出品された。

学徒出陣回想

田中市郎衛門



早いもので、学徒出陣ゆかりの地である国立競技場千駄谷門の一隅で、「学徒出陣壮行の地」の除幕式が行われてから一年を経過しようとしている。その折植樹した同期の桜・万葉の桜の二本の苗木も昨今の日照り続きのなかでも順調に根づいていた。競技場関係者の話では「年配の方だけでなく若い人にも結構人気がある様で、食

見かけます」とのことであった。

平成五年一〇月二〇日の除幕式は、秋晴れのなか五〇〇人を越える戦友・遺族・壮行会で見送ってくれた元女子学生等関係者が相集い盛大に挙行された。どの顔も七〇年の風雪に耐えて生き残ってきた元学徒兵は、秋雨のなかを隊列を組んで行進した当時を回想し、肩を組み乍ら同期の桜を合唱し、征って還らなかつた戦友を偲び二度と戦禍にまみえることのない永遠の平和を祈念した。

私達の成長期の我国は、満州事変・日中戦争と軍国路線を盲進し、ついに昭和一六年一二月世界列強の包囲網のなかで米英との開戦を決意せざるを得なかつた。当時国論は、戦わずして敗れることを潔よしとせず、最後の一兵まで戦うことよってのみ死中に活を求めの心境であった。開戦劈頭米太平洋艦隊の主力を潰滅した海軍も、翌一七年六月、ミッドウェー海戦を境に彼我の戦勢は逆転され、また陸軍もニューギニア、ガダルカナル争奪戦に敗れ、各地で苦戦を強いられていた。当時、軍主脳は「大東亜戦の帰趨は航空要員の優劣により決せられる徴候が顕著である」と思考し、航空要員を更に大量に且つ急速に養成することに救国の期待をかけていた。

そうしたなかで、昭和一八年一〇月二日勅令により全国大学高専の文科系学生の徴兵猶予が突然停止され、一〇月二一日元神宮外苑競技場において「出陣学徒壮行会」が挙行された。折からの秋雨をついて分列行進する出陣学徒、スタンドを埋めつくした後輩・女子学生・征く者と送る者が一体と

そうしたなかで、昭和一八年一〇月二日勅令により全国大学高専の文科系学生の徴兵猶予が突然停止され、一〇月二一日元神宮外苑競技場において「出陣学徒壮行会」が挙行された。折からの秋雨をついて分列行進する出陣学徒、スタンドを埋めつくした後輩・女子学生・征く者と送る者が一体と

なつて、しばしあたりは感動に包まれた。ついで二月一日約一〇万の学徒が学業半ばにしてペンを捨て銃をとり決然戦場に赴くことになった。世にいう「学徒出陣」である。

顧りみれば当時私共は、祖国と同胞のため一身を国に捧げること何のためらいもなかつた。自己を犠牲にする

参考 陸軍特別操縦見習士官

期 別	入 隊 年 月 日	入 隊 人 数	戦 没 者 数	特 攻 戦 州
一 期	昭一八・一〇	約二、五〇〇人	七〇一人	二二二二人
二 期	一八・一二・一	約一、二〇〇	一三九	七六
三 期	一八・一二・一〇、一九・四	約一、六〇〇	三三	五
四 期	一九・六	約一、〇〇〇	二二	一
計		約六、三〇〇	八九五	三三三
幹部候補生七・八・九期				
海軍飛行予備学生・生徒				
予備学生 一三期	昭一八・九・三〇	四、九八八人	一、六〇七人	四四七人
予備学生 一四期	一八・一二・一〇	三、三三二	四一〇	一五九
一五期	一九・八・一〇	二、六〇八	二二	一
一期生徒	一八・一二・一〇	一、九七四	一六五	三七
予備学生 一〇、一二期	一七・一、一七・九	二七一	一六二	九
計		一三、一六二	二、三六六	六五二

ことによって、美しい祖国と親愛なる親兄弟を救ってやりたいという肉親愛であったかも知れない。私の場合東部六部隊に入隊したが、学徒兵一二〇〇人のうち九〇〇人がこぞって陸軍特別操縦見習士官を志願し四五人が選抜された。

戦史によれば陸軍特操に六三〇〇人、海軍予備学生に八三〇〇人の学徒兵が採用となった。その頃は相次ぐ空襲と資源の欠乏により航空機の生産も低下していたが、戦勢を逆転させるため最後の手段として航空特攻が最も期待されていた。特操一期、予備学生一

三期は入隊後一年にして勇躍比島作戦に参加し、生還を期すことのない任務を受け、一片の肉片すら残すことなく南冥の地に散華され、引続き沖繩作戦には学徒兵を主とする陸海特攻が敢行された。戦史によれば陸軍航空特攻のうち将校の割合は学徒出身者が七割を占め、海軍の場合は八割の多きに達した。征って還らなかつた戦友の死力を尽して国に殉じた純粹な行動と眞実は永く後世に伝える必要があると思う。

永遠の平和を希求し乍ら志半ばにして散華した戦友の遺志を継ぎ、生残った我々は祖国再建のため友の分までと国家社会のため尽力してきたと思う。半世紀を経た今日、我国は経済大國と

して発展し、世界のなかで最も平和と自由を享受できる国家として見事に蘇みがえることができたが、これも偏に祖国と同胞の永遠の繁栄を願って、尊い一命を捧げられた数多くの学徒出身の航空戦士のご加護の賜であると思う。

「学徒出陣壮行之碑」は次第に風化しつつあるあの悲惨な戦争の歴史的事実を永く後世に伝えんと共に、次代を担う内外の若き世代に、再び戦禍にまみえることのない世界の恒久平和実現のため献身努力されることを願望するものである。

(特操二期)

当時のニュース映画

学徒出陣



不運つづぎの出撃に号泣す

— 誠第一一四特攻隊記 —

少飛14期 福谷 宗雄

この頃わが残存空軍の数もメッキリ少なくなり南方の空の制空権は完全に敵に奪われていた。

昭和二十年三月二十五日。台湾、台中

州、彰化飛行場の朝は鉛色の雲が低く垂れこめていた。

ひる前になって全員第一種軍装で本前に集合するよう達しがあつた。

この記事は少飛会編「最後の戦闘機」という書物に掲載されたものですが、往時の我々の気持がよく現れていると思ひここに転載してもらふことにしました。

少飛会 佐藤彰平

「一体何ごとだろう」と、話合いながら学徒出身の将校五十余名をしてわれわれ少飛三十五名が集合を終つた。

沈黙の緊張のまま待機している我々を前に隊長永岡少佐は緊迫した沖繩の戦況を一応説明した後これから指名する者は一歩前に出るようにと、早速、

将校から順に竹田少尉、原少尉、小山少尉と、ついで私の名も呼ばれた。

以上十四名の者は明日から第八飛行師団の指揮下に入るため桃園飛行場に進ませよとのことであつた。

私は一瞬電気にうたれたように「ジン」と身がひきしまると同時にいいようのない複雑な気持ちにかられた。明かに特攻出撃の命令であつた。

その日の夕食は部隊全員が集り我々の成功を祝つての会食が催された。

私も生まれてはじめてのウイスキー

を飲んでみた。また炊事係の班長はいままで大事に飼つていた鶏をつぶして御馳走してくれるなど部隊の皆さんが我々を急に特別あつかひしだした。

その夜は持物の整理や、髪を切つて戦友にあずけたり何だか遠くへ旅に出かけるような気分、床に入つてからもなかなか寝つかれなかつた。

明けて二十六日はじめて各人の飛行機をもらった(二式複座戦闘機)。この時になつてあらためて任務の重大さを感じた。そして部隊全員の熱狂的な見送りの中を十四機は爆音も勇しく翼を振り基地に訣別を告げた後、桃園飛行場へと機首を向けた。

後方座席には機付の整備班員を各機に一人ずつ乗せた。私は先輩十期生の井上軍曹の僚機として従い日の暮れる頃桃園飛行場に全機無事着陸した。

我々はこのここでひとまず空中勤務者宿泊所で待機することとなつた。昼間は愛機の手入れに精魂を注ぎ夜は全員で作戦を練つたり故郷へ最期の便りを認めるなど至つて朗かで死地におもむくという悲壮感の微塵もなく、むしろ浮ききつた気分が出撃命令の日を待っていた。

この宿泊所でも我々をすごくいいいにもてなしてくれ、食べ物、飲み物すべてに至るまで気を配つてまるで生神様扱いにされた。

特に宿舎の女事務員黒木、勝又、加藤の三人の娘さんたちには心から親切にしてもらったことは忘れられない。

ある夜私と伊藤、馬締の三名はお嬢さん方の部屋に招かれた。

今生の思い出にと、とっておきの踊りを、披露したり、歌を唄つたりして後、数日にして散つて行く私たちを涙を流して励ましてくれた。この時は戦地に来て以来まるで肉親と会えたような喜びと温さを初めて味わうことができた。

この夜のできごとは、若い恋とか、愛とかいうような浮わつてたものではなく、同じ人間同士の純愛が苛烈な戦局を背景に自然な形で結ばれたものであつたのだらうと、あれから二十数年もたった今でも私は美しかった当時の人間愛の深さを、つくづくと回想することである。

翌日我々は新聞記者と会う機会を得た。記者の話では、我々は比島でも多くの特攻隊員に接したが、この「誠特攻隊」のように朗かで明るい隊員ははじめてだと、聞かされた。

竹田隊長以下十四名の毎日の生活は揃つて快活で子供の時分遠足へでも出

かけるような喜びに胸をはずませ、死地に旅立つと云うような悲壮感はどうしても湧いてこなかった。

彰化飛行場で特攻命令を受けてからちょうど一週間目の三月三十一日遂に前進基地へ出発の命令がきた。

師団から作戦参謀が見え新たな任務が我々にあたえられた。

私たちは台北の婦人会から贈られた日の丸に「誠」の字入りののはち巻を飛行帽の上から締めた姿で全員整列。参謀から沖繩の戦況の説明を聞いた。「当攻撃隊を誠第一一四特攻隊と命名する。当攻撃隊は明四月一日宮古島飛行場に前進し沖繩の嘉手納沖の敵艦船を攻撃せよ」と、出撃命令は下された。

やがて参謀と、部隊長を中心に最期の盃が厳肅のうちに交された。昨日まであれ程朗かだった隊員たちも今日は刻々迫る死の出撃の興奮と緊張のため誰一人として一言も話さない。ついで隊長の指揮で宮城と各人の故郷の肉親へ訣別の敬礼を行なった。午後三時過ぎになると愛機「屠竜」は既に試運転が開始され出撃機十四機はいっせいに砂塵を巻きあげている。

整備員たちも我が部隊初めての特攻出撃とあって凄く張切って機敏に動き基地は色めきたった。

飛行場には見送りの人たちが手に手に日の丸を持って相当数、整列して私たちの動作を注視している。

午後四時、全機は竹田隊長を先頭に爆音も高らかに一機また一機と慎重な離陸をはじめた。

私も負けじと「それーッ」と気合をかけて離陸、やがて飛行場上空を一周した十四機は整然と編隊を組み、竹田隊長の合図で一斉に翼を何べんも大きく振った。

飛び立った飛行場ではまだ日の丸の旗や、ハンカチをちぎれるほど振っている姿がハッキリと見える。やがて我々は機首を北東の血戦場、沖繩の空に向け急いだ。

台湾の影が次第に遠くへ見えなくなる頃から雲量が増してきた。そこで我々は上昇して雲上に出た。雲上飛行はとても気持が良かった。だが肝心の素敵は常におこたらなかつた。はるか下方を海軍のゼロ戦が編隊であわただしく飛んでゆく、戦局がただならぬ様相であることを改めて身を感じる。だが幸に雲は次第に淡くなり青い海面も見えだした。そして白いペンキを刷毛で塗ったような波だけが白く輝いて美しかった。

しばらくして、波間にポツカリと、浮かんた島が見えはじめた。地図を見

ると石垣島であることが判った。

機上から見る島の風景は如何にも平和そうで、戦いのカケラは一片も見当らない、至極のどかさうであった。

夕陽が西の海に沈む頃、やっと宮古島上空にたどりついた。

この島には陸軍と、海軍の二つの飛行場があった。

連日の空襲で短い滑走路はどこどころやられている。応急補修の箇所もはつきり上空から見えた。

我々は次々と着陸態勢に入り、全機整然と着陸を完了した。

我々の到着がすでにわかっていたのか、飛行場には多くの人々が出迎えに来てくれていた。基地の軍人は勿論、島民に至るまで、特攻隊の我々に最大の望みをたくしているのだろう。私たちも感謝の気持でこれに応えた。私たちが感動の気持でこれに接して

砂糖などお盆にのせて心から接待してくれた。

よし必ず皆をアツと言わせるような、大戦果を上げて見せるぞと私は心の中で強く誓うのだった。

夜は部隊の食堂で、心づくしの御馳走になった。御馳走といっても、台湾に較べると至ってお粗末なものであったが、食糧不足のこの島では敵の万一の上陸に備えて、平常は代用食で我慢

していることを聞いて胸が熱くなった。我々は戦場の、きびしさをここで、はじめて味わった。

明朝の出撃の打合せも終り私たちは、飛行服のまま床に就いたが、いくら眠ろうと思っても次から次と故郷のことなどが思い出されて、一向に寝つかれなかった。

夜半三時に起床。星の美しい夜であった。飛行場に着くと、愛機は暗闇の中で早くもテスト運転の力強い爆音をあげていた。

隊員一同集合して、作戦参謀からの戦況と、任務があらためてあたえられた。そしてうす暗い飛行場の片隅で別れの盃がまたしても交された。相変らず隊員一同は黙して語らない。ただ、でく人形のように突立っているだけである。

各人それぞれ故郷の父母兄弟と、宮城の方向に向き直って、深く頭をたれる。私も今頃故郷の父母はどうしていることだろうか、また、私の出撃をどんな気持でおられるだろう。私は「永いこと御世話様になりました」と、心の奥で別れの挨拶を述べた。

死の時は刻一刻と駆足で迫ってくる。すでに愛機の両翼には、二百五十キロ爆弾二個の取付けを終った機もあった。だが、どうしたことか、出発

準備が意外に手間どり、半数の七機だけが準備が終った頃には、東の空はほんのりと白みはじめてきた。参謀たちは心もどかしげに「準備できた機から直ちに発進せよ」と、叱声の指令が列線に飛ぶ。

先ず竹田隊長以下一小隊の四機が、あわただしく発進した。私もこれがこの世の見おさめと飛行場の土を手にしっかりとにぎりしめてみた。そして整備班長に、革の手袋を脱いで「これが私のかたみです。生きて帰られたらどうか私の家まで届けて下さい。両親にもよろしく伝えて下さい」と、お願いして最期の堅い握手を交した。そのときの整備班長(名は忘れた)の手は心なしかふるえていた。そして最後にふるえ声で、福谷伍長しつかり頼む、と言ったまま後が声がつまったのか、よく聞きとれなかった。私も急に目頭が熱くなったが、男らしく「よしッ」と、気合をかけて機上の人となった。そして形どおりの試運転を行い各計器類を点検する。ところが、バッテリーがきれているのか、或は接続が悪いのか、各計器灯が一個も点灯しない。もうすでに一隊は場周をゆるやかにまわっている。私はいらいらして、整備班長に「これはどうしたことか、どうも調子がおかしいじゃないか」と思わ

ずどなりつけた。

整備班長は、目の色を変えて再点検をはじめたが、時間はおかまいなく過ぎてゆくばかりだった。他の小隊も爆弾の取付が終らず、都合我々七機は遂にとり残されてしまった。もう人の顔もハッキリ判別できるほど明るくなってきた。

参謀から、今夕を期して攻撃するから、一応待機せよと、命令変更の伝達があった。

あいにく夜明の頃から雲量が次第に多くなってきた。

一時間もすぎた頃、視界不良のため隊長以下六機は基地に引返して来た。だが十三期生の、大井清三郎伍長先輩は、単機誘導機について、慶良間列島の大型輸送船に突入、これを見ごと撃沈した(これは誘導機の確認による)。先輩は大の元氣者で、常日頃我々後輩に良く指導してくれ兄貴として尊敬していた立派な人物だけあって攻撃精神の手本を我々に示してくれたのであった。

その日我々は、二、三名ずつ分散して飛行場の近くで待機していた。

昼間はグラマンの波状攻撃がはげしくつづいた。でも私たちは後数時間の命でもむぎむぎと、地上でやられたくはなかったし、空中勤務者として地上

で戦死することは、恥と考えられていたので細心の注意を払いながら退避することを忘れなかった。

そして「今に見る俺たちが地獄へ連れて行ってやるから」と同期の伊藤伍長と笑いながら話していた。彼は体も大きく人一倍の熱血漢で頼もしい男であった。

壕の中では時間のたつのが非常に早く生涯のうちでこんなに時間が短く感じられたことはなかった。

午後四時すぎ自動車で飛行場に着いてみると大部分の機は出動準備中で、あわただしく整備員が立働いている。見送人は今晩の出撃と異り参謀以下多数の人々が見えていた。

また民間人(私たちは当時こう呼んでいた)も多数来てくれている。私の愛機はまだ誘導路を出て来ていない。何故だろう。私はまたしてもいらいらしはじめた。

そのあいだに簡単なテーブルが出されて、今未明と同じ要領で酒とコンプが準備され盃が酌みかわされた。

参謀もかねてと違って、ていねいな口調で、一人一人に頼む、頼むと、握手をして回られた。

この時皆元氣良くハイと答えたが、誰もが幾分顔が青白くなっていた。自分自分の顔も相手が見たら青白くなっ

ていたことだろう。

それぞれ故郷と宮城の方へ別れの頭を垂れた。これで二度目であるせいも、もうこの時は大井先輩につづこうという悲願だけで、すべてをあきらめていたので、さ程怖くもなくまた不安も消えていた。

その頃私の飛行機はようやく、始動車により引張り出されてきた。でもあまり急いだのか尾輪は途中でパンクしたままであった。この期におよんで「なんたることだ」と私は泣き叫びたような気になった。整備員は必死になつて修理しようとしたが、今頃そんな時間の余裕のあるはずはない。参謀は「どうだこれで離陸できるか」と心配気な顔で私に聞かれる。

私は大声で「ハイ」とこたえたものの、だが果して五百キロもの爆弾を積んで無事離陸できるだろうかと不安になつてきた。

しかも連日の爆撃で弾痕だらけの短い滑走路では、しかしこの時になつて一刻の猶予も許されない。

隊長機から順に重い爆音を残して出撃機はすでに離陸して行った。私はエンジンをつけたまま遂に一番後に取残されてしまった。

おかれてはならじと尾部を最初から上げるようにして滑走に移った。他の

機は既に飛行場を一周して編隊を組んでいる。私はあせりにあせった。どうにか離陸は成功したものの今度はエンジンの調子がおかしくなってきた。私は懸命に手をつくしてみたが、原因はサッパリ解らないまま、機は海上に出ってしまった。

それから五、六分も飛んだらどうか、レバーをいっぱいふかしてみようか、しても他の機について行けそうもない。私は隊長機に機体を上下に振り故障の合図を送った。他の機は心配そうに私の機を見守ってくれているようであった。「くそ」このまま海中に突入しようかと、とっさに考えたがまた一方の頭では故障をなおして再び出なおしもできるのだ、「よし」思い切って飛行場へ引返そうと私は決心した。機はいいよ高度は低くなるばかりなのでまず重い爆弾を海中に投下した。

これで幾分機は浮いたように感じられたが、速度も急に落ちはじめ高度は遂に百メートルに低下した。

その時はるか遠くに白い砂浜が見えはじめた。あそこまでは是非たどり着こうと懸命に桿を握る。だが、片発は

完全に停止してしまった。目の前に青黒い海がせまる。衝撃と同時に目の前が真暗になる。もう後は何もわからな

い、どれだけの時間がたったのだろう。私は冷たい海水でやっと思がさめた。機を見ると三平方メートル位の珊瑚礁の上に乗上げて大破しているではないか。体が自由に動かない。頭と手をひどくやられている。この故障機の特攻機を見送ってくれていた島民がはるか陸の方から小舟を漕いで救出に来てくれた。そして私を砂浜に抱きあげてくれた。私は一人砂浜にたえずみ沖繩の空を仰いで男泣きに思い切り泣いた。ああ何たる不運、私は一人取残されてしまったのだ。このまま生きてなんでおめおめ基地に帰れよう。いっそのまま海へ飛びこんで死にたい衝動に駆られた瞬間、また気を失っていた。

その後、島に駐屯の工兵隊に助けられ夜半野戦病院に送られた。他の戦友は沖繩の空に散り目的を達成した。私は毎日ぼんやりと気が抜けたように病床に横たわっているばかりだった。私が入院しているあいだ我が三練飛から二次、三次と特攻隊が編制されて沖繩の敵艦船に突入して征つた。

それは大部分の者が少年飛行兵出身

者であった。 誠一四特攻隊員の辞世(名は不明)

散りて後残す一字は只誠 国に捧げた命うれしき

- 誠一四特別攻撃隊員
- 陸軍少尉 竹田 光興
- 同 原 照雄
- 同 矢作 一郎 特操二期
- 陸軍々曹 井上 忠雄 少飛十期
- 陸軍伍長 大井清三郎 少飛十三期
- 同 藤井 広馬 少飛十三期
- 同 伊藤 喜三 少飛十四期
- 同 馬締 安正 少飛十四期

感 状

昭和二十年四月二日沖繩本島西南海面に於て戦艦を含む有力なる敵部隊を攻撃し大井伍長は二日払暁那覇西側海面に竹田少尉以下七名は同日薄暮慶良間列島西側海域に夫々敵艦船を捕捉熾烈な対空砲火を冒して体当り攻撃を敢行、戦艦二隻、巡洋艦二隻、大型輸送船一隻轟撃沈、艦種不詳一隻を大破炎上の戦果を挙げ。

以上の記録は復員後戦闘日記より整理した。最初十四名中実際に突入に成功した者八名、他の七名は何等かの事故により生存或は後戦死となっている。

参考までに二式複座戦闘機の性能、

乗員二名、最大速度五四〇キロ、航続力二千キロ、爆弾は特攻機として二百五十キロ二個。

特攻隊員に捧ぐ、の歌より 春風に散る若桜

惜しみてあまる若武者よ 血をも肉をも捧げはて 神鷲再び還るなし 神鷲再び還るなし

噫 特 攻 永野秋則

風肅肅月半輪煌 太白中天島島蒼 運命定茲空決戦 敢然當敵艦勳芳 紅顏痛未桜花蕾 今夕又翔求巨隼 飛燕不帰無限思 英魂鎮此漲靈光

風肅々として月半輪の煌き 太白 中天に 島々 蒼し 運命茲に定まる 空の決戦 敢然として敵艦に当たる勳 芳し 紅顏痛わしや 未だ桜花の蕾 今夕又翔ぶ 巨隼を求めて 飛燕 帰らず 無限の思い 英魂 此に鎮まり 靈光漲る

この詩は去る3月23日の特攻追悼式の直会で吟じられたものである。

人間魚雷「回天」

この記事は昭和36年3月山口県徳山市大津島に回天碑が再建されたとき、回天碑再建世話人会が発行した「回天」と題する小冊子より要点を抜粋し、小項目を付したものである。

回天の採用と殉職

人間が魚雷の中に乗り込み、接敵した母艦潜水艦から発進し、自在に操縦して敵艦に命中しようとする着想が出たのは、十八年晩秋の頃だった。

当時戦争はすでに極めて悲観的で、ソロモン方面の全面的敗退について、マーシャル群島にも火が付きはじめた。こういう時機に、黒木中尉と仁科少尉の二人の青年士官が、九三式酸素魚雷を利用する人間魚雷を考え出したのである。

二人の不眠不休の努力が一撃必沈の強力な兵器の青写真となり、やがて中央当局に対する採用運動に移って行った。しかし必死を前提とする中尉らの創案は、なかなか採り上げられなかった。ところが、この間にマーシャル群島の失陥、トラック島の大空襲等が相

ついで起り、尋常一様のことでは最早どうにもならぬことが、はっきりしてきた。かくして十九年二月末、人間魚雷が〇六兵器という秘匿名称で試作されることになった。

昭和十九年の初夏、この試作兵器が完成し、崩れかかった態勢を挽回し、回天の偉業をなさしめようとの黒木大尉の悲願の命名が容れられて回天と名づけられたが、その性能の概要はつぎの通りであった。

長さ十四・七米、直径は一米、総重量八噸、上げ下げ可能な約一米の潜望鏡を備え、潜航浮上、変針変速は自在であり、また自動的に一定深度、速力で直進できる。射程は三十ノットで二十三ノット、十ノットで七十八ノットであって、頭部に一・五噸のTNT炸薬をもっている。そして中央部に操縦室があり、一人の人間がその中に腰かけて操縦するのである。

十九年九月はじめ、徳山湾にのぞむ大津島に回天訓練基地が設営され、ただちに訓練が開始されよ。ところが創始者の黒木博司大尉は、第二日目、つまり九月六日の夕刻、樋口孝大尉との同乗訓練で海底に突入し、無念の殉職を遂げてしまった。

兩大尉が回天第一号の艇内で、絶命するまでの約十時間の間に書き残した

二千余字におよぶ遺書は、国を憶う一念に貫かれ、涙なくしては読むことができない。(黒木大尉遺書全文後掲)

その後回天訓練が進むに従い、殉職者の数を増し、終戦までに十五名に及んだ。その氏名は次の通りである。

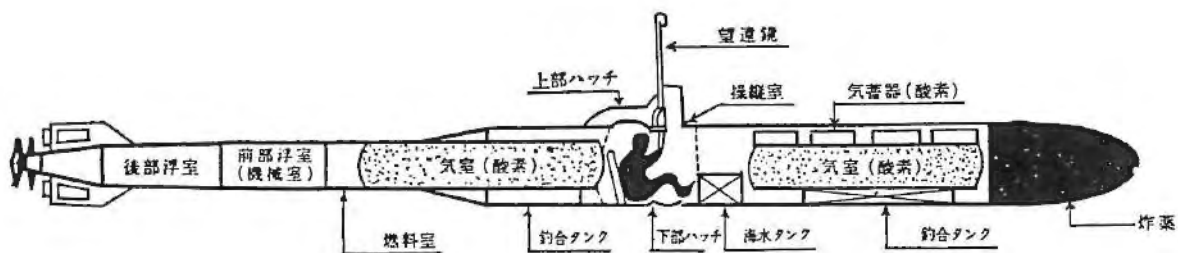
黒木博司・樋口 孝・中島健太郎・宮沢一信・矢崎美仁・三好 守・坂本宣道・十川 一・入江雷太・坂本豊治・榎原武男・北村鉄郎・和田 稔・山本 孟・小林好久以上十五名

戦 歴

回天による作戦は大東亜戦争の末期、すなわち昭和十九年十一月から終戦までの十カ月間、ほとんど休む暇なく続行された。

先ず最初の菊水隊作戦は、伊号第三十六潜水艦、伊号第三十七潜水艦、伊号第四十七潜水艦の三隻、これらに搭載の十二基の回天によって、十九年十一月二十日南洋諸島ウルシーとパラオのコソル水道に対して行われた。この作戦でウルシーを奇襲した回天が油槽艦ミシシネワを撃沈し、敵に多大の脅威を与えたが、次の回天搭乗員が敵中に突入戦死し、伊号第三十七潜水艦が沈没した。

上別府宜紀・仁科関夫・村上克巴・福田 齊・佐藤 章・渡辺幸三・宇都



回天断面略図

炎上するミシシネワ号



宮秀一・近藤和彦・今西太一以上九名

第一回の菊水隊作戦について、昭和十九年の暮、金剛隊が編成された。これは当時の最精鋭潜水艦六隻と回天二十四基から成り、二十年一月中旬、ウルシー・アドミラルチイ・ホーランド・コッソル水道・グアム島のアラ港等五ヶ所の敵前進基地を奇襲した。

この作戦でつぎの十九名の回天隊員が戦死した。

川久保輝夫・原 敦郎・村松 実・佐藤勝美・加賀谷武・都所静世・本井文哉・福本百合満・久住 宏・伊東修・有森文吉・石川誠三・工藤義彦・森 稔・三枝 直・吉本健太郎・豊住和寿・塚本太郎・井芹勝見以上十九名

金剛隊作戦のあと、戦局は急激に悪化し、二月中旬、敵の攻略部隊が硫黄島に進攻して来た。そこで伊号第三百六十八潜水艦、伊号第三百七十潜水艦、

艦、伊号第四十四潜水艦の三隻で千早隊が編成され、硫黄島に急行した。この作戦で伊号第三百六十八潜水艦と伊号第三百七十潜水艦とは遂に帰らず、左の十名の回天搭乗員が戦死した。

の五隻の潜水艦が沖縄の海に姿を消し、左の十名の回天隊員が戦死した。

三月下旬、敵は遂に沖縄島に攻めて来た。そこで陸海空の全戦力がこの一戦に投入されることになった。

もしこのまま局地作戦を続行すれば、残存潜水艦は、またたく間に全滅するであろう。そこで四月下旬、出撃する伊号第四十七潜水艦、伊号第三十六潜水艦の天武隊から、回天も洋上で使用されることになった。

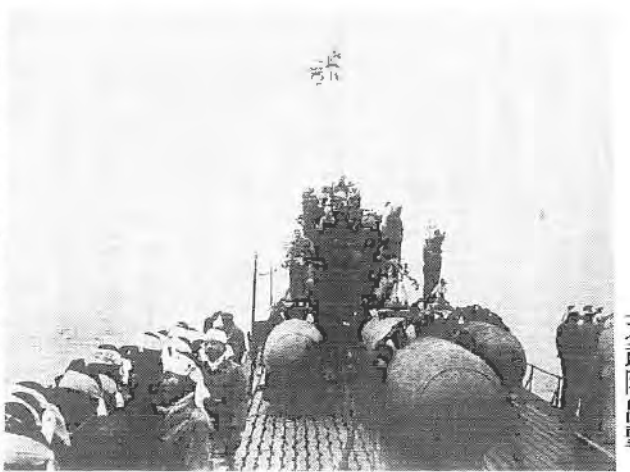


千早隊出撃

沖繩とサイパン、またはウルシーを連絡する中央附近で、四月二十七日から五月七日までの十日間の内に、この二隻の潜水艦は、敵艦船九隻を血祭りに上げた。この戦闘で左の八名の回天隊員が華々しく散った。

千葉三郎・小野正明・小林富三雄・金井行雄・斎藤達雄・田辺 晋・岩崎静也・池淵信夫・久家 稔・柳谷秀政・水知創一・北村十二郎以上十二名の回天隊員が戦死した。

五月はじめから六月にかけて、振武隊の伊号第三百六十七潜水艦、ついで轟隊の伊号第三百六十一潜水艦、伊号



天武隊出撃

戦争の最後の一ヶ月は、日本海軍潜水部隊が掉尾の勇を振った特筆すべき時機であった。そしてその主力が回天特攻隊多聞隊の六隻であった。

広島、長崎に投下した原爆をテニア
ンに運搬した直後の重巡洋艦インデア
ナポリスを撃沈し、アメリカ海軍に深
刻な打撃を与えた多聞隊の一艦伊号第
五十八潜水艦の偉功は特筆に値するも
のがあった。

この最後の作戦で

勝山 淳・関 豊興・川尻 勉・荒
川正弘・伴 修二・水井淑夫・林 義
明・小森一之・中井 昭・成瀬謙治・
上西徳英・佐野 元以上十二名
の回天搭乗員が敵艦諸共沈んでいっ
た。

こうして、回天作戦のため、その搭
乗員を志願し、大津島・光・平生の各
基地に集った二千余の若人たちのう
ち、回天に搭乗殉職したものの十五名、
回天で敵中に突入戦死したものの八十
名、基地回天隊戦死搭乗員九名、回天
整備のためこれに伴って出撃戦死した
者等三十五名計百三十九名の青年が、
この回天作戦のため一命を国に捧げた
のである。

回天の悲願は空しく、戦は破れた
が、若人たちの祖国愛は、大津島の回
天碑とともに永遠に消えることはない
であろう。

若桜 散りて還らず

今ははや 言いて甲斐なし

仰ぎ見む 君がおもかげ

たたえなむ 君がいさおし
われらまた 辿りてゆかむ
君が歩みし 苦難の道を
君が歩みし さかえの道を

回天創案者黒木少佐が海底で 認めた遺書

一九一九一六回天第一号海底突入事
故報告、

当日一八時一二分樋口大尉操縦、黒木
大尉同乗ノ第一号海底ニ突入セリ、前
後の状況及所見次ノ如シ、
一、事前ノ状況

当日徳山湾内ニテ樋口大尉ノ回天操
縦訓練ニ同乗、一七四〇発射、針路蛇
島向首、一八〇〇頃一八〇度取舵、大
津島「グレーン」ニ向ケ帰途ノ途中、
一八一〇ヨリ二〇節潜航、調深五米ニ
対シ実深二米、前後傾斜D二〇三度、
時二ハD四〇五度トナリシコトアリ、
当日第三次操縦訓練同乗者仁科中尉ノ
所見ニ波浪大ナルトキ、同様二〇節浅
深潜航中、俯角大トナリ一三米迄突込
ミタル由ノ報告アリ、之ヲ想起シ、充
分ニ注意ナシアリシ所、約二分ヲ経過
シ、浮上ヲ決意シ、操縦者ニ浮上令セ
ントシテ傾斜計ヨリ眼ヲ離シ、電動縦
舵機等所要箇所ニ注目シツツアリシ
時、急激ニ傾斜大トナルヲ感ゼルヲ以
テ、傾斜計ヲ注目セルニ、D一杯トナ

リアリ、察スルニD一五度程度ナラ
ン、直チニ速力ヲ急速低下セシモ、若
干時ノ後、猶傾斜ノ戻ル気配ナシ、此
ノ間操縦者ニ深度改調ヲ〇トナスコト
ヲ命ゼシモ間ニ合ハズ、傾斜計ヲ見ル
ニD七度、深度一八米ナリ、海底ニ突
入セルコトヲ知り、直チニ停止ス、突
入時衝撃ナシ。
二、応急処置

1、五分間隔ニ主空気一分間放気、
調圧ヤー〇キロトナシ、気泡ヲ大
ナラシム、残圧六〇キロ、
2、縦舵機用操舵空気ヲ常時絶ヘザ
ル如ク放気ス、
3、電動縦舵機ヲ停止ス、
4、海水タンク諸弁ノ閉鎖ヲ確認ス
(前方下ノミ注水シアリ)、
5、浸水部ヲ確ム、水防眼鏡ノ
「バックン」部ヨリ滴々落下スル
外異状ナシ、
6、電灯異状ナシ、
7、操空圧力不明(最初読ミ取リア
ラズ)、
三、事後ノ経過

1、主空気ノ放気ハ一八四五ヨリ五
分間放気セントセシ際、一九〇〇
ヨリ若干放気後停止、残圧三〇キ
ロ、前回放気ノ前ニハ残圧五〇キ
ロアリテ、五分間一〇キロニテ放
気セルモノナリ、

2、操空ノ放気ハ一九一九分、数十
回ノ操作ト同様ニシテ、操空連絡
弁ヲ稍急激ニ開キシ所、異音ヲ発
ス、即チ、縦舵函上蓋「バック
ン」噴出シ、筒内気圧急昇ス、耳
ニ痛ク感ゼリ、依ッテ直チニ閉
鎖、爾後放気不可能、
3、一九二五主空気放気セルニ、筒
内ニ操舵機函ヨリ噴気スルヲ以テ
短時間ニテ停止、
4、一九四〇頃「スクリュー」音ニ
ヲ聞ク、前者ハ直上ニテ停止セル
モノノ如シ、但シ爾後遂ニ何等ノ
影響ナシ、爾後種々ノ音響ヲ聞ク
モ近キ音ナシ、

四、所見
1、波浪大ナルトキ浅深度高速潜
航ノ可否ハ実験ヲ要ス、確タル成
績ヲ得ルマデ嚴禁ヲ可ト思考ス
(若干処置ヲ誤リシハ、当所ノ水
深ヲ十二米ト判断シ、実深ヲ知ル
能ハザリシニヨル)
2、早急ニ過酸化曹達ヲ準備スベ
シ、
3、事故ニ備ヘ、用便器ヲ要ス(特
ニ筒内冷却ノ為)、
4、実験ヨリシテ二人乗ハ七時間ヲ
限度トス、
5、「ハッチ」啓開ヲ試シモ開カ
ズ(空気不足ト思考セラルルニヨ

ズ(空気不足ト思考セラルルニヨ

リ、只今(一九五五)ヨリ睡眠ス)

6、陛下ノ艇ヲ沈メ奉リ、就中〇六

ニ対シテハ、畏クモ、陛下ノ御期

待大ナリト拝聞致シ奉リ居リ候

際、生産思ハシカラズ、而モ最初ノ

実験者トシテ多少ノ成果ヲ得ツツ

モ、充分ニ継続者ニ伝フルコトヲ

得ズシテ殉職スルハ、洵ニ不忠申

訳ナク、慚愧ニ耐ヘザル次第ニ候、

7、恩師先生ヲ始メ、先輩諸友ニ生

前ノ御指導ヲ深く謝シ奉リ候、

8、小官申シ残ス処更ニナク、唯長

官、総長、二部長等ニ意見書有

之、聊カ微衷御汲取リ下サレ度、

9、必死必殺ニ徹スルニアラズン

バ、而モ飛機ニ於テ早急ニ徹スル

ニアラズンバ、神州不滅モ保シ難

シト存ジ奉リ候、

10、必ズ神州挙ツテ明日ヨリ速刻体

当戦法ニ徹スルコトヲ確信シ、神

州不滅ヲ疑ハズ、欣ンデ茲ニ予テ

覚悟ノ殉職ヲ致スモノニ候、

天皇陛下万歳、大日本帝国万歳、

帝国海軍万歳、

追伸

1、舷外灯ヲ設クベキ事、

2、応急「ブロー」ヲ設クベキ事、

3、駆水頭部ヲ完備スベキ事、

今回ノ事故ハ小官ノ指導不良ニア

リ、何人モ責メラルルコトナク、又

之ヲ以テ、〇六ノ訓練ニ聊カノ支障

ナカランコトヲ熱願ス、

4、一型ニ於テ、海水「タンク」注

水及「ブロー」ニ大錯誤アリ、至

急研究対策ヲ要ス。片方「ブ

ロー」出来ズ、注水量不良ナリ、

仁科中尉ニ、

万事小官ノ後事ニ関シ、武人トシ

テ恥ナキ様頼ミ候、潜水艦基地在隊

中ノ(キ四八期(〇〇大尉ニ連絡ヲ

頼ミ候、御健斗ヲ祈ル、〇六諸士並

二甲標の諸士ノ御勇健ヲ祈ル、機五

十一期級友切ニ後事ヲ囑ス(終)

辞世 男子やも我が事ならず朽ちぬ

とも 留め置かまし大和魂

国を思ひ死ぬに死なれぬ益良

アラランコトヲ、

雄が 友々よひつ死してゆく

らん

1、自室紫袋内ノ士規七則ヲ黒木家

ニ伝フ、家郷ニハ戦時中云フコト

ナシ、意中諒トセラレヨ、父上、

母上、妹、御達者ニ、

2、血書ハ分配ヲ堅ク御断リス、但

シ一通司令官ニ納メテ戴キタシ、

人生意気ニ感ズルモノナリ、

二二〇〇壁書ス、呼吸苦シク思考ヤヤ

不明瞭、手足ヤヤシビレタリ、

〇四〇〇死ヲ決ス、心身爽快ナリ心ヨ

リ、樋口大尉ト万歳ヲ三唱ス、

所見万事ハ急務所見乃至急務靖献ニ在

リ、同志ノ士希クバ一読、緊急ノ対策

アラランコトヲ、

一九一九一七、〇四〇五絶筆、樋口大

尉ノ最後従容トシテ見事ナリ、我又彼

ト同ジクセン、

〇四四五 君ガ代齊唱、神州ノ尊、神

州ノ美、我今疑ハズ、莞爾トシテユ

ク、万歳、

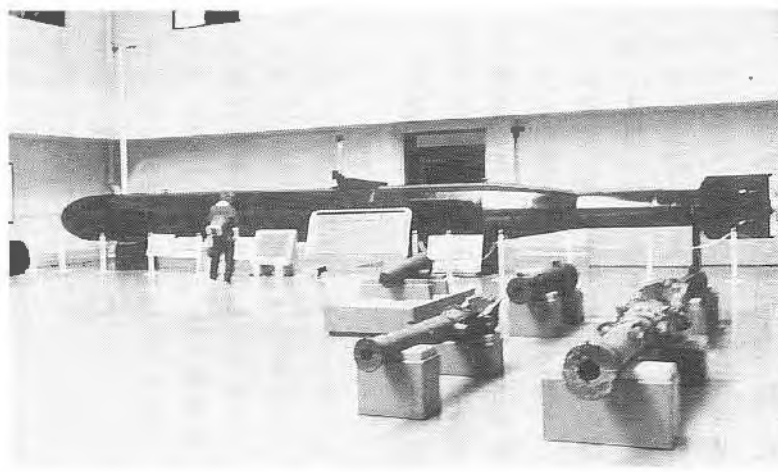
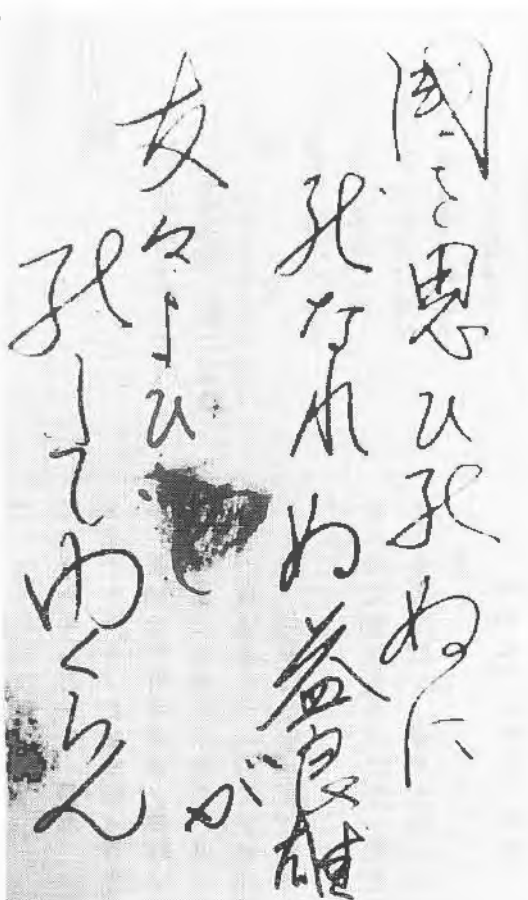
~~~~~

註1 誤字など一部修正を加た

2 終戦時自決者二名(樋口寛・松尾

秀輔)

全国回天会



靖國神社遊就館にある回天

# 回天碑の碑文

回天の碑は国内数箇所にあるがその碑文には次のようなものがある。これらの碑文は後世に語りかける貴重なものと言えよう。

## 大津島基地

### 回天碑

山口県徳山市大津島字馬島

碑文(側碑)

大東亜戦争 年ヲカサネテ苛烈ヲ加ヘ物量漸ク乏シキヲ告ゲテ前途暗澹タリシ時 愛國ノ至誠 弱冠ニシテ早クモ危急ヲ豫感シ 忠孝ノ純情 一身ヲ献ジテ狂瀾ヲ既倒ニ回サントシ 前代未聞ノ兵器必死必勝ノ戦法ヲ創案シテ 従容自ラ之ヲ操縦遂行セシモノ 即チ是レ回天ノ勇士ナリ 惜シイ哉時既ニオソク 戦勢ヲ一転セシムルニ至ラザリシト雖モ事敵ノ意表ニ出デテ其心膽ヲ寒カラシメ ヨク皇國ノ命脈ヲ危殆ノ中ニ護持セシモノ 其ノ功偉ナリト言フベシ ココニ回天献身ノ勇士ノ氏名ヲ録シ 以テ芳ヲ千秋ニ伝フ

## 平生基地

### 回天碑

山口県熊毛郡平生町  
松庫海事(株)入口

碑文

神嘯鬼哭 回天の壮拳  
若き生命 南海に挺し  
莞爾として皇國に殉ず  
悵恨 戦い時に利非ず  
山河むなしく桑滄の變  
さわれ至誠盡忠の赤心  
日本民族の血脈に漲り  
昭々無極の後世に輝く  
碑を發祥の地に建立し  
肅然 久遠の靈を祀る  
昭和三十四年  
七月十八日  
桑原用二郎

## 下呂信貴山頂

### 回天碑

岐阜県益田郡下呂町  
信貴山頂楠公社

碑文(側碑)

大東亜戦争苛烈トナリ、存亡に瀕セル日本ノ国体護持ト再興隆ヲ悲願トシ、自ラハ若キ生命ヲ捧ゲシ

ガ、回天特別攻撃隊ナリ

昭和十九年八月一日、黒木、仁科少佐ナド青年ノ創案嘆願ガ許可サレ、大楠公ヲ仰ギ菊水ノ旗印ノモトニ参集セル若人千余名、其ノ内体当り突入百二十七柱、訓練殉職十七柱、搭載潜水艦八隻ガ犠牲トナレリ  
茲ニ回天殉道忠士ノ壮烈ト純情ヲ偲ビ英名ヲ刻シ、芳ヲ千秋ニ伝ヘントス

昭和五十五年五月吉日

回天会

下呂信貴山頂 回天碑側碑  
東海回天会設立

## 佐久市貞祥寺

### 回天之碑

長野県佐久市前田  
洞源山貞祥寺境内

碑文

昭和十九年太平洋戦争年を重ねて苛烈となり、戦勢ようやく我に利あらざる時、憂國の至情に燃えし黒木博司少佐、仁科関夫少佐は第一特別基地隊に在りて、前代未聞必死必殺の水中特攻兵器、人間魚雷を完成、もって頽勢の挽回を計らんと「回天」と命名徳山湾大

津島に基地を定め、日夜一人一艦必殺の戦法操縦訓練に励む。黒木少佐は訓練に殉じたるも、仁科少佐以下敵前進基地ウルシー、パラオ・コッスル水道、ホーランジア、グアム・アブラ港に、また硫黄島、沖繩附近海域、中西部太平洋上に大津島、平生、大神の各基地より出撃し敵艦に体当り攻撃を敢行せり。

戦遂に利あらず昭和二十年兵を収むるまで戦没並びに殉職搭乗員の英霊百五十余柱帰らざる潜水艦八隻その乗員八百十余柱を数う。散華せし勇魂を仰慕し回天の偉業を後世に伝えんと、創始者仁科少佐の出身地佐久に、永遠の世界平和を念じつつ長野県出身戦没並びに殉職搭乗員仁科関夫少佐、北村十二郎少尉、中島健太郎大尉、宮沢一信中尉の靈安からんことを祈念し戦友相寄り「回天之碑」これを建つ。

昭和五十一年六月六日

長野県回天会



## 特攻基地第二国分の記

## 白雲にのりて

## 君還りませ

より

前々号（平成6年5月発行の19号）にこの書物に掲載されている第一草薙隊時任正明少尉（予備学生出身20年4月6日特攻出撃戦死）の姉、川路貞の一文を紹介した。それは、同少尉が沖繩作戦の為名古屋から第二国分に進出し、出撃を明日に控えた夜電話で家族と話し合ったという件である。前回は紙面の都合でそこまでの引用に止めたが、記事にはその後がある。

電話による会話が終わった後、父母は面会は出来ぬと言われたが、夜を徹して飛行場に駆けつけるのである。そして離陸直前一こと言葉交すことができるのであるが、それに至る一部始終も含め極めて感動的なので、ここに紹介さ

「それではお父さん、大分長くなりましたから、これでお別れいたしましょう」

「では、お父さんも、お母さんもすぐ行くよ」

それで電話はきれた。静まり帰った部屋に、シーンとした一瞬の沈黙。

だが、それもほんの一瞬、何を考える暇もなく、父はあわただしく近在の町に電話でタクシーを探した。だが深夜ではあり、当時の事情でとうとうそれも無望に終わり、三里離れた駅迄、父と母は夜を徹して歩くことになった。時刻はちょうど十二時半だった。

私も行きたかった。飛行機の後姿でもよい、心から弟の万歳をさげび、その門出を祝ってやりたかった。武運も祈りたかった。飛行機の後姿がなかったら、せめて最後にいた場所に座ってみたかった。だがこの幼な児を背負って、三里の夜道を如何にして一番汽車に間に合おう。足手まといになるばかり……と思ひ直した。

家に帰って大急ぎで御飯を炊き、おにぎりをつくり、身ごしらえも嚴重に、近所の人一人を頼んで父母は家を出た。ちょうど二時、今から行って五時半の一番汽車にようやく間に合う時間。

父も母もどんな気持ちでこの三里の夜道を急ぐことだろうと思うと、私はたまらなかつた。だが覚悟は充分でき

ていた筈、今更何を案ずる必要があるうと思ひつつも、国分に行っても、数時間前まで話した弟の影はなく、飛行機の後姿を見るだけだったら如何なだろう。と今初めての感傷に、独りひそかに涙を流すのだった。

祖母は黙っていた。いつまでも黙って天井を見つめていた。祖母の胸を去来するもの、それは何であつたらうか。私も話さなかつた。智子をあやしなから、思ひはるか幼い昔にかえる。末っ子で、一番きかん坊で、わがまま

まで、そのくせ面白いことばかり言ったりしたりして、周囲の人達を笑わせればかりいた弟、戦死した兄はいつも「正明はこせこせしない、おおらかな大きな人間に育てて下さい」と言っていた。父も母も寛大すぎると思つた。自由に伸ばしてやった。兄の望むとおりに朗らかに明るく素直に育つていった。

高商時代水泳の主将として、五輪の夢に憧れ、楽しい抱負を語っていた。中央大学には行ってからは、兄を失つたためか、人一倍親思いになり、

親達を喜ばせてやりたい、淋しがらせまいとする心遣いが、手紙にも時折の休暇で帰った言葉の端々にも満ち溢れていた。体も思想も急に大人びて、兄の面影そっくりになってきた弟は、父

母を慰めるに充分だった。

卒業する頃は、戦局はますます重大さを増してきていた。海軍では予備学生が生まれ、陸海ともに特攻隊の名が大きく浮かび上がってきた。卒業すれば当然進まねばならぬ軍人への道だった。父としては亡兄の後を継がせたく、当然陸軍にはいるものと思つてた。だが小さい時から海を泳ぎまわり、海を愛してきた弟は、卒業を前にして、随分迷ったのではないかと思つた。

口には出さなかつたが、亡兄を失つた両親の心境を知り過ぎる程知っていた弟は、この道を選ぶのに、一人悩み苦しんだのではなからうか。

卒業直前海軍予備学生を志願したことが判然した。だが父も母もその報せを前にして、「本人の進みたい方へ進んだら良い」と、一言の愚痴ももらさなかつた。本人としても、当時の時局から、止むに止まれぬ志望であつたと思う。こうして遂に予備学生としての第一歩を踏み出した。

(中略)

程なく一緒に行った人が、無事一番汽車に間に合った事を知らせてくれた。

父母の帰宅するまでの長く短かつた幾時間……。

残された品物を受取り、足どりも重く帰ってくるであろう両親を想像していた私は、夕方になり帰って来た両親の眼の輝き、頬の輝きに驚かされた。そして、その輝きは以外なことを伝えてくれた。

「出発十五分前機上の正明に会えた」という事を……。

そんな事が本当にあり得るだろうか。そんな奇蹟に似た事が信じられようか。何で私もついて行かなかつたらうか。口惜しさ、悲しさ、いろいろの感情が入り乱れ、ワッと声を上げて叫びたい様な気がする。だが、興奮の中にも心を落ちつけ話してくれる両親の話の聞いているうち、立派に笑って征った弟の姿が眼前に浮かぶ。

父と母のかわるがわる話してくれた話をそのまま、父と母の言葉そのままに記してみよう。

『家を出たのが二時、三人で三里の道を急いで、栗野の駅に着いたのが四時過ぎでした。(その頃は切符の買えない頃で、二日も三日もかかってようやく切符が手に入るような有様でした)』

四時過ぎに着きましたものの、駅は切符を買う人達が、前の日からズラリと先着順に並んでいました。切符が買えるだろうか、とその心配が一通りで

はありませんでした。父と母はようやく買えましたが、頼んで行った近所の人はどうとう買えず、無事一番汽車の間に合ったことを伝えて下さいと頼んで、又三里の道を帰ってもらいました。栗野発五時半、単人に着いたのが八時少し前、ここで国分行きに乗り換えねばならず、待ち合わせが一時間でした。その間の待ち遠しかったこと、立っても居てもいられない様な気持ちでした。

発車の時間が来て、国分の農学校に着いたのは午前九時でした。

先生が玄関に待っていて下さいました。そして先生の方から先に「時任さんの御両親ですか。お待ちしております」と優しくおっしゃって下さいました。こちらからも御挨拶申し上げました。先生のおっしゃるには、「昨日午後一時頃、時任さん方はお着きになりました。時任さんから預かり物や、御伝言がございましてお待ちしております。今朝の五時半にここをお発ちになり、今どんどん十三塚原(始良郡溝辺村)の方に飛行機が飛び上がっております。(本当に次から次に上がっております)学校が宿舎になりました。士官さん方が大変お忙しくあちこちしていられる中に、一人鹿児島弁の大変上手な士官さんがあると、生徒た

ちが笑っておりましたら、夕方になり、鹿児島弁で「先生、これを伊佐郡の本城に届けて下さいませんか。私は伊佐郡の本城で、家にどうにかして連絡とりたいと思っておりましたが、忙しくてできませんでしたから、元気で征ったとこれを届けてください」と申されますので、「そうでしたか。私も子供を戦地に出しております。親の心は皆同じです。それでは私が連絡をとってあげます」と、先生が連絡をとり下さって、役場に電話がかかってきたのだそうです。

それから着替えや、帽子や短剣を渡して下さいました。「小使室の机の上に遺書が置いてあります。帰宅後開封するようにとの事でした」と申されましたので、行ってみますと、両親に宛てて一通封筒に入れてあり、便箋も万年筆もそのまま置いてありました。全部受け取ってから、又、先生が申されますに、「伊佐郡の方とわかってから先生も喜んで、時任さんに大変御馳走になりました。そして生徒達にいろいろ良いお話をさせて頂き、自分達はこうして国を護るため、喜んで征くが、僕達だけではない。後に続く者がなくては。それはあなた方だ。何とぞ後を頼む。と申されまして良い士官さんだったと生徒た

ちも申しておりました。お金も全部渡されますので、少しぐらい持って行きなさいと申しましたら、三途の川を渡るときの渡し賃に十円持って行こう。亦、着替えも他の方達は、下着には自分の精神がこもっているからこのままで行こうとおっしゃいましたが、時任さんは、全部着替えて行かないと、あの世で鬼が袈裟に居るとき、こんな汚れを着ていたかと笑うからなどと、冗談を言って笑わせたり……。誠に良い方でした」と申していらっしやいました。

先生方三人と生徒五、六人小使室で正明がご馳走し、それから地図等を出して整理し、両親に遺書を書き終えたのが二時半か三時、それがすんでもう一通「満州に居る兄に書きたいが、もうどうしても書けない」と申しましたので、先生が「もうよいでしょう」と申されましたら「それではもう今夜これで、正明は寝みます。明日はここを五時半に出ます。寝過ぎたらいけないから、三人の先生方は今夜は休まずに、時間を間違えない様起こして下さい」と頼まれて、私共三人は休まず、時間通り起こして、ここをお発ちになりました。と先生はその時初めて涙をハラハラとこぼして、すすり泣きに泣かれました。

涙をハラハラとこぼして、すすり泣きに泣かれました。

そして「今日は何時に発ちますのでしようか」と尋ねましたら「午後一時だそうですね。時任さんが言われますに、今日は父母が参りますが、来て面会はできないでしょう。上まで来た時は来ては良いですが……と申されました。まだ時間はありますから、おいでになりませんか。道がおわかりになりませんか」と、校長先生がおっしゃって下さいましたので、素直に生徒さん一人お借りして、飛行場に登り初めました。

案内の生徒さんが申されますのに「近道と、あたり前の良い通とあります。近道は険しい道ですが、当たり前前の道を行って登りついた時は、近道の方は往復できるくらいです。でも、おじさんには歩かれてもおばさんには無理でしょう」と申されますので、母は一分でも早く着いたら子供に会えそうな気がして、人様の行ける道なら私も行けないことはないでしょう、と近道の方を選びました。

ら、ようやく十一時十五分過ぎに着きました。

登りついてみますと、それはそれは広い広い飛行場で、向こうの方にたくさんさんの飛行機が向い合って並んでるのが目につきました。

心は一分でも一秒でも早く飛行機のところへ飛んで行きたい思いでした。が、軍規を犯すことを恐れ、又、一旦お国に捧げた子供の後をどこまで尋ねて、女々しいと子供の士気を鈍らせ、その名譽を汚すようなことがあっては、子供に対し申し訳ない、と三人で只うなずき合っていました。

前の晩二時に家を出て三里の道を歩き、更に二里の坂道を登りながら、一口も何にも口にしないで行きましたので、オニギリでも食べたらずと出しましたが、三人とも一口も食べられず、只出しただけで飛行機の方ばかり見えました。

私達の傍を通る人は一人もなく、尋ねる術もなくイライラしていました。母が急に水が欲しくなり、向こうに水道が目につきましたので、父と三人水道のところまで行って水を貰っていましたら、飛行服を着た方が傍らをお通りになりますので、思い切って父が、「子供が昨日名古屋から来て、只今ここを発ちますが、面会はできないも

のでしようか」と申しましたら

「それはできませんよ。後四十五分あります。早く向こうの天幕の中におられますから、お急ぎなさい。この滑走路を横切って天幕のところにお行きなさい」と言ってお下さしたので、一生懸命かけ出し、滑走路を天幕の方に曲がった時「万歳」の音が聞こえました。

三人が一緒に「しまった」と言ったときはもう万歳の三唱が終わり、終わったかと思うと、搭乗員の方がドヤドヤッと溢れ出るように駆け出してこられ、見る間に自分自分の飛行機に飛び乗られ、飛行機は次々に離陸しはじめました。百台ぐらいの飛行機だったでしょう。整備兵の方々があちこちかけまわる……。

エンジンの音、プロペラの音、もうもうと立ちこめる砂塵……。

何と形容したら良いのか、筆舌に尽くし難いものがありました。

「せっかくここまで来て、面会の時間は充分あったのにあんまり遠慮していけなかった。もう仕方ないから」どうせ面会は出来ませんから、来られた時は飛行機でも見送って下さい」との電話でしたから、飛行機でも見送りましょう。と立っていました。父は、とにかく天幕のところまで行って見よ

うと行きました。天幕の中は、壮途を祝した乾杯の後をとどめていたそうです。

父が天幕のところに行った後、母の前に搭乗員の方が見えましたので、

「あなた方は今お発ちになりますか」と申しましたら

「いいえ。私は発ちませんが何か御用ですか」と申されますので

「ハイ。子供が名古屋から昨日来て、只今ここを発ちますが間に合いませんでした」と言いましたところ、

「それでは早く ナコ と書いた飛行機をお探さない」と申されました。

ちょうどそこへ父が「天幕の中には誰もいない」と母のところへ参りましたので、その事を父に伝えましたが、探そうとしても、向こうの飛行機までの間は遠いし、次から次に離陸する度に砂塵であたりの人も見えず、眼も開けられず、どうしようもなく只じっと見ておりました。

そのうち、それぞれの飛行機に「ウサ」「ナコ」の標のついているのが解り、尚もじっと見えていますと「ウサ」の飛行機がどんどん離陸し、「ナコ」の方が残っている様に思われました。

でも、もうとても会えないものと諦めて、飛行機の上る度に「万歳、万歳」を叫びながら見送っていました。

ちょうどそこへ、四十二、三歳の農夫の方が父の前に急いで来て、

「あなたは、本城の時任さんではございませんか」父が「ハイ」と申すが早い

「息子さんはあそこです。指揮官機です」

と父の手をギュッと握って駆け出しました。父は「早くお前達も走れ、走れ」と先に駆けて行きました。

母はもうどうにも息がきれそうで、足が運べなくなりましたので、生徒さんに

「お父さんさえ会えば良いです。私はもう息が切れそうで足が運べないからいいです」と言いますと、その生徒さんが大変親切な方で、「いいえ、おばさん、もう一頑張りです。頑張って下さい」と、私の手を引いて下さいました。その時又農夫の方が走り戻っていらして「早く、お母さん」と二人で手を引っ張って、ようやく正明の飛行機のところへ駆けつけました。

父が先にかけて、「正明」と声をかけましたら、正明が

「はい。お父さん、来られましたか。お母さんは？」

と言ったところへ私がかけてきました。正明はニコリ笑って後を向いていました。父も母も一緒に

「よかったね。元気で征きなさい」

「有難う。お父さん、お母さんお体をお大事に。おばあさん、お兄さん、姉さんよろしく。本城の近所の方々によろしく」

と言って、すぐに伝声管で何か申しましたら操縦席の窓が開き「高橋です。行って参ります」と元気な声でニコニコ笑っておっしゃいました。

「元気で行ってらっしゃいませ。御武運を祈ります」と申し上げますと、すぐに窓を閉め、ジッと前方を見つめていらっしやいました。正明が

「お母さん、もう少しこちらに寄ってみなさい」と申しますので飛行機の傍に寄りますと、普段と少しも変わらない顔で、いつものニコニコ顔で

「何も思い残すことはありません。喜んで征きます」とニコニコ顔でした。

父も母も、これが最後の別れなどと言ふ事はちょっとも考えませんでした。只もう万歳万歳で、涙一つ出ませんでした。

吾が子でありながら、神の子のような思いで、有難い有難いと心の中に両手が合わせられている様で、これが永

久の別れなどという事は少しも考えられません。涙一滴出ません。只有難い有難い、万歳万歳と普段出ない大声が出ます。

私達が駆けつけると、女の夫婦達が十名位「奥さん、良かった良かった」とうしろで泣いています。「どうして？」と尋ねますと、「私達はこんな

に長くお話できたのに、一番話さなければならぬお父さん、お母さんが折角ここまでいらして、お会いなさるところができなかったら、と思っていました

たら会われて良かった」と、嬉し泣きに泣いて下さいましたが、父も母も一滴も涙など出ませんでした。

そろそろ正明達の飛行機も離陸の準備が整いましたので、別れを告げて後に退りますとプロペラが廻り始めました。

正明は白いマフラーの上に、絹のトキ色のハンカチを巻いていましたが、それを解いて一生懸命振り振り、機は地上を離れました。機上の二人は、あ

たかも鳥帽子を被った様に神々しく高く見えました。

人夫の男女の方々二十人位と父母は、声を限りに万歳万歳を叫びました。

飛行機は翼を振りながら飛行場の上をゆるく一旋回し、別れを告げて南の空遠く飛び去りました。

正明達の発った後、まだたくさん飛行機が残っておりましてので、全部の飛行機の発つまで見送りました。

その日(四月六日)お発ちになった

方々は、皆、日の丸のついた手拭の向こう鉢巻きで勇ましい姿でした。そして皆ニコニコ笑ってお発ちになりました。

どの飛行機も翼を振りながら、飛行場の上をゆるく旋回して、私達の頭上を南に向かって飛び征きました。

正明の父だと云うことがどうしてわかったかと申しますと、特攻隊の方々が天幕の中に休んでいらっしやる時、

人夫さん達が行っていろいろ話をされ、その間に正明が「私は伊佐郡本城の時任といひます。今日は都合によ

ては、父と母がこの飛行場に来ているかも知れません。あなた方、よい折があったら父と母に『元気で征った』と伝えて下さいませんか」と頼んだそうです。

それで農夫の方が、もしかしたら……と思つてあちこち探していらっしやうと、尋ねて下さったのだそうです。

こうして、いろいろな方達のおかげで面会ができました。面会の時間は十分か十五分位だったでしょう。父と母の話は終わった。

こうして弟は征った。朝に夕に睦ん

で来た弟は、私達の傍を遠く飛び去り、二十五年の若い花の盛りを、悔いもなく恨みもなく、南の空に散った。残された遺書、それにはこう書かれていた。

本日突然に国分に進出、明日を期しで出撃します。名古屋空より転出の途中、本城の上を高度二千米にて通過しました。感無量でした。敵来襲の頻化と皇国の防衛に二十五年の運命を賭して、立派に武士の子として戦って来ます。今更に残し置くべき事もありません。唯、慈愛深き御両親に今日迄、正明何等恩に報ずる事なく、唯々残念に思いおります。二十五歳の今日迄何自由なく、今此の光栄ある攻撃隊の中堅将校として参加し得る日を得さしめ下されし御両親他皆々様の御養育、限りなく身に沁みます。

明日の出撃は勿論生還は期し得られません。然し心中誠に静かなるものがあります。

正明は皇国防衛の前提として満足して莞爾と散って行きます。

国分農学校の当直室に此の書を進めつつも本城の家に帰っている様な気がします。今夜の星は又特に美しく、御両親の面影が目前にちらつきまします。桜花爛漫と咲き薫る南国の空を飛び立って、小生の故郷鹿兒島を出撃の第一線

に為し得たる事は何にも代え難く喜しき事です。

正明、桜花咲く靖国の社、智三人兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に征きます。

御父様、御母様、正明亡き後も何卒何卒力落とさず、元気に暮らして行って下さい。御両親の悲しみは小生にとつて最も苦しい事です。

正明は満足です。

今日は一時頃到着しましたが、業務多繁遂に連絡する暇がありませんでした。お許し下さい。

父上にも母上にも現下日本の現況に既に覚悟ある事と思えます。

日本は皇国です。絶対不滅です。我々は此の信念の下に生きて来ました。人類の正義の道を示すものは皇国の道にあると思えます。

此の身南九州彼方沖繩の海辺に、敵艦に轟音と共に散るも、心は常に国を護り家を守っています。

書けば果てしなく思えば尽くる事もありません。身を潔め心を静めて明日は南海に散ります。

父様母様末永く御身大切に小生と共に散る人は兵学校出身高橋中尉です。縁あらば宜敷御願ひ致します。

荷物は後の分は名古屋空第一士官次

室海軍少尉厚地兼之助氏か、川野良介氏に頼んで置きました。連絡してみして下さい。

遺髪とも云う可きものは残しません。帽子、短剣を正明と思つて居て下さい。

部隊名 神風特別攻撃隊草薙隊  
海軍少尉 時 任 正 明

御祖母様、正明も愈々征きます。可愛い孫乍ら何時も御心配掛けました。

正明戦死の後も何卒御身御大切に永く永く長寿を保つて下さい。

正明は御祖父様と智三人兄の側に願います。

四季の度に山に川に何時も元気で本城を駆け廻っていた正明の姿その儘の姿で、明日は飛行機で征きます。武人の家の子として充分初陣乍ら闘います。武勲を待つて居て下さい。

時折に大好きな焼酎を願います。両親をお願ひ致します。そして後兄

弟三人も御身体呉々も御大切に御祖母様へ 正明

五日の正午過ぎた皆さんの飛行機が上空を飛んで行くのを母も私も見ました。

ああ今日も亦特攻の方達が……と心からその武運を祈った。

その飛行機に、高度二千米から……と書いた弟が居たのだった。

「死」を前にして送られる者、送る

者、まして親子の間に何の偽りがあるう。父母の一部であり、正明の一部である私にはその心がよく解る。

心から喜んで征き、心から万歳を叫んで見送った父と母、それは同時に全特攻隊員の心であり、遺族の方達の心である。

長男を失った時は、頼りにしていただけに深い悲しみに打たれた父母であった。兄は父と母の力をも奪ってしまった様だった。ひとの前ではめったに涙を流さなかったが、心の中で深く泣いていた。

だが、正明の発つ姿を十三塚原の飛行場に見送つてからは、気持ちもくると変わった。心から喜んで征つたのだ、何も悲しむ事がある。頑張るのだ、戦いに勝つ日まで必死になって働くのだ……。文字通り父と母は今までよりもっと仕事に張りを持ち、生甲斐を感じたかのように働き出した。

正明のあの出発の時を思えば、今迄の様に泣いてはいけけない。正明に負けない様に働かねば、正明に済まない。と、今迄しなかつたひどい仕事も辛いとも言わず、目に見えぬ大きな力を与えられたもののように、活き活きとした気持ちで働き出した。

父母の愛はどこまで深く強いものかと、私は打たれるものがあつた。

## 慰霊顕彰行事は 戦後生まれの手で

大東亜戦争に身をもって参加した者は殆んどが七十歳を越した。日本人男子の平均寿命は76歳だというから、今のように戦友達の手で慰霊祭を実施することは、まだ暫くは続くだろうが先は見えていて、早晚跡絶えてしまう。我々の気持の現れとしての慰霊ならばそれでよいだろうが、顕彰となると老人の集いでは全く無意味である。

国士館大学教授金城和彦氏が主宰している殉国沖繩学徒顕彰会の祭典は、毎年沖繩戦終焉の日である六月二十三日に靖國神社で行はれ、本年度四十九回目となる。この行事運営はすべて若い人の手で行はれていることに敬意を表し意を強くする。受付案内等は勿論のこと、今回祭文を奏上したのは東京大学修士課程の学生臼井秀之氏であり、それに続く献楽の独唱、奉納吟、合唱、ともに若い人達によって行はれている。

先ず祭文の要点を紹介する。  
……米軍は、その年三月末に至り、果然我が日本列島の最南端たる沖繩に、戦史未曾有の物量と兵力とをもつ

て強行上陸を企てたのでありました。これに對して、軍官民が一体となって応戦、武運拙なく敗れはいたしました。が、三ヶ月もの長い間、米軍を釘づけにし、本土が戦場となるのを防ぐ事が出来ました。

これは将兵の勇戦はもとより、まさしく沖繩県民が身を挺して、祖国日本の防波堤となり、一億同胞の身代わりとなつたからであります。

中でも、師範学校男子部や中学校の健児たち、並びに女学校の乙女たちが、祖国存亡の危機に際して起ち上がり、その多くがついに力尽き、散つて

いったという事実は特筆すべきものであり、涙と共に永遠に語り継がれる事でしょう。花も蕾の中学生が、敵侵攻と共に鉄血勤皇隊及び通信隊を編成して軍人となり、直ちに戦列に馳せ参ずるや、天空暗き壮絶なる戦闘の真唯中に、雄叫びをあげながら敵戦車に突入し、敵陣に斬込み、或ひは息絶えるまで通信、伝令等々の任務を遂行して、その殆どが鬼神も哭かしのむる壮烈な最期を遂げた事や、又、「ひめゆり学徒隊」を始めとする女学生が、男子に劣

らぬ榮譽を担って従軍看護婦となり、矢弾降りしきる最前線に於て、天使のような笑みを忘ることなく負傷兵の看護に当り、哀れその大半が天翔ける

身となつた事は、語り尽くせぬ深い悲しみとそのまばゆいほどの崇高な姿に、唯々胸打たれるばかりであります。

恐れ多くも、先帝陛下の沖繩に對する大御心は、人並ならぬものがございました。先帝陛下は、積年望まれておられた沖繩への行幸が決まつた昭和六十二年、病に倒れられました。その苦しみの病床におかせられて、

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを  
と、沖繩を思われるその大御心を御製に託されました。

その先帝陛下の大御心を継がれました今上陛下が、昨年四月下旬、天皇としては初めて沖繩に行幸なされ、亡くなられた方々をお慰めなさいました。今上陛下の沖繩に對する大御心もまた厚く、皇太子殿下時代、既に五回も御み足を運ばれ、戦歿された忠魂を琉歌に託してお詠みになりました。そして、日本人として忘れてはならない四つの日の一つとして、今日のこの六月二十三日を国民にお示しになられました。

しかし、今上陛下のこの有り難い大御心にも拘わらず、外務省を中心とした政府は、本日、陛下が日本におられないような日程でアメリカ御訪問を計

画しました。さらに、今日という日に真珠湾のアリゾナ記念館へのご訪問を計画するという、沖繩戦で亡くなられた方々や、その遺族の方々のお気持ちを顧みぬような暴挙に出ようとしましたが、幸いにも、心ある人々により、真珠湾への御訪問を撤回させる事が出来ました。……

……あの国難に身を挺して散華された英霊の尊い犠牲の上に現在が成り立っているという歴史を、戦後生まれの国民の多くが一顧だにせず、遠い過去の闇の中へ押しやろうとしております。しかも、来年の終戦五十周年を機に、国会に於て謝罪決議を行おうとする動きがあります。これこそ、祖国を失う暴挙と言わずして何でありましようか。

かかる現状に鑑み、我々現在の日本人が、東京裁判に毒されている大東亜戦争の意義を見直し、国に殉じられた英霊の思いを真摯に汲み取り、その心を世の中に訴え続けて参ります事を固くお誓い申し上げます。……

ここに述べられていることは我々にとつて至極当然のことであるが、戦後の若い学徒がこのように奏上されたことに深い感銘を覚える。それに続いて「海ゆかば」の独唱の

あと次の吟詠が奉納された。

嗚呼沖繩戦の学徒隊

今様漢詩 金城 和彦

和歌 金城 ふみ

吟詠 八雲 一

(今様)

矢弾の中で 健気にも

咲いて散りにし 若桜

尊き御霊よ 安らかに

五色の雲に 祈るらむ

(詩)

愛国の至誠 烈火の如く

童顔の学徒 防戦に当る

刀折れ矢尽き我が事畢る

相抱き相擁して遂に玉碎

(和歌)

悲しさのあまり井戸までかけたれど

水汲みし子の 足あともなく

―ひめゆり部隊に

二人の娘を捧げた母の歌―

(詩)

砲声天を焦がし 弾雨降る

血河山野 阿修羅の如し

学徒挺身 死地に赴く

嗚呼忠魂 万古に勲る

最後は「ゆには合唱団」によって学

徒隊を偲び沖繩県立第一中学校、沖繩

師範学校女子部、県立第一高等女学校

の校歌が合唱されたが、国難に殉じた

生徒達を髣髴させるものがあつた。更

にまた学童疎開途中撃沈された対馬丸  
で水漬く屍となつた児童の為「故郷」  
の歌が合唱された。

このような行事を文部省が主催して  
行う世にならねば、我が国の魂の復興  
は日暮れて道遠しと言はざるを得な  
い。

沖繩県立第一中学校校歌

(第四節)

建国二千六百年

栄ある歴史偲ぶれば

我等が務軽からず

いで山中の健男児

若き血潮のよどみなく

奮い励めよ国の為

沖繩師範学校女子部

沖繩県立第一高等女学校校歌

(第二節)

波の上のほころおごそかに

なみ静かなる那覇の海

ながめゆたかに棟そびゆ

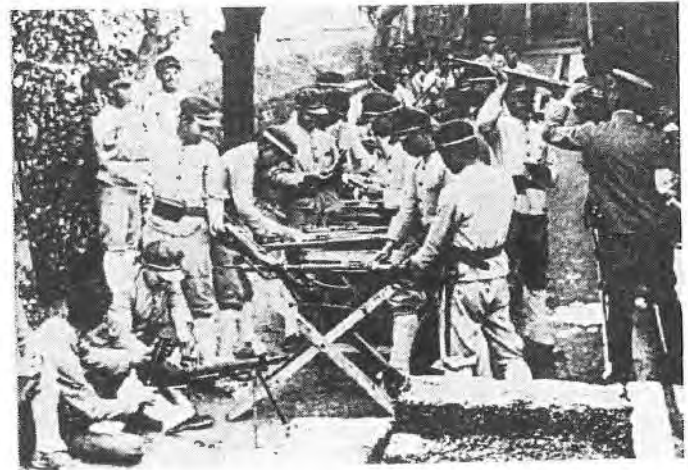
これぞ我等が学の舎

友よいとしのわが友よ

玉とかがやう乙姫の

心のひかり磨きえて

世に鏡としかがやかん



県立第一中学校の生徒たちが、鉄血  
勤皇隊を編成して和田中将麾下に入隊  
したとき、九九式歩兵銃が支給された  
が、不足分は学校教練用の三八式歩兵  
銃を使用した。

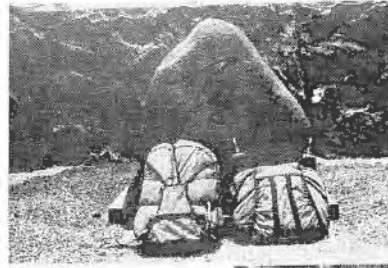
ひめゆりの塔に眠る乙女たちの在り  
し日の面影。5月下旬南部に後退した  
頃は、すでに衛生材料の医薬品もなく  
なつたが、彼女らは天使のような笑み  
をもって傷ついた将兵の看護に命の限  
り挺身した。

写真は金城和彦氏著「嗚呼沖繩戦の  
学徒隊」より。



# 高野山空挺墓前祭

9月4日 空挺同志会



戦友、遺族、自衛隊空挺隊員及元空挺隊員等約五百人が参加、ここ一年間の物語者のうち七柱新合祀

## 空挺部隊英霊の遺した歌 三首と遺族の詠んだ歌三首

墓前祭の祭文の中に含まれていた歌であるが、解説を付して紹介する。

いつ行くかいつ散るのかは知らねども  
今日のつとめに 我ははげまん

昭和18年6月18日、挺進第四聯隊では演習中に小丸川を渡渉しようとし伊藤中尉以下八名が水流

に押し流されて殉職した。この歌は誰が作ったのか判らないが、小丸川殉職碑に刻まれている。

この聯隊は翌年比島で戦い大半が戦死した。昭和19年12月6日、レイテ空挺作戦が開始されたのであるが、第一次降下部隊である挺進第三聯隊がルソン島アンフェレス飛行場を発ったあと、宿舎の壁に次の歌が書き残されていた。

花負いて空うち行かん雲染めん  
かばね悔なく 我等散るなり

このときレイテ島各所に降下した者は白井聯隊長以下一人の生還者もない。この歌は川南護国神社裏庭に建っている「空挺落下傘部隊発祥之地」碑の土台に刻まれている。

内地ではこの頃サイパン特攻の義烈空挺隊が編成された。この部隊はその後紆余曲折の末、約半年後の20年5月24日に沖繩に突入して玉砕するのであるが、出撃が決ったとき副隊長の渡部利夫大尉は次の歌を遺した。

かねてより祈りしときに今会いて  
心の中ぞ うれしかりける

この歌は航空自衛隊新田原基地内に空挺歌碑を建立したとき、十三首の中の一つとして刻み込まれている。

中国の古典(毛氏大序)に「詩は志の之く所なり」という言葉がある。志の存する者に歌が生れるのであって、憂国の至情進るところ肝胆に徹する歌が現れる。それは単なる作詞の巧拙に依るものではない。遺された歌はまだ沢山あるが、亡き

戦友のものはこれまでとし、次は遺族の歌を三首掲げる。

昭和19年10月20日敵がレイテに上陸するや、その四日後にあたる24日に第二挺進団の先陣として挺進第三聯隊に動員が下令された。約二四時間出動準備完了し翌日夕刻には屯営を出発、鉄道輸送で佐世保に向った。佐世保で空母隼鷹に搭乗しフィリピンに向ったのであるが、営外者は24日の晩僅か数時間帰宅することができたほどの慌しさだった。つかの間の別れを惜んで送り出した妻の歌、

さらばとて夫の握れるたくまじき  
み手のぬくもり 今も残れる

やがて届いたのは戦死の公報だった、  
中野光義少尉の妻 中野和枝殿

迎え火をたけば父様飛行機に  
乗つて来るかと 吾子は問うなり

梅野九中尉の妻 梅野チヨ子殿

父いまさねば動くあれよと子をさとし  
おのれをさとす 淋しくもあるか

これらの歌を誦すると、遺された人の御心情腸を断つの思いがする。恩愛の情を断ち切り、親兄弟妻子を守る為決然身を捨てた大精神を、後世に確かと語り伝えることが、老醜の身に課せられた使命である。最後に腰折を一首、

日の本のいとしはらから守らんと  
君は進みし もののふの道